

ひらお はちさぶろう
平生鈺三郎と
小林一三
こばやし いちぞう



台湾製糖会社視察、前列左より4人目が小林、6人目が平生。
1926(大正15)年8月(大阪ロータリークラブ 当時平生が会長を務める)

理想家肌の平生鈺三郎対
現実主義の小林一三

阪急阪神東宝グループの創業者小
一三は平生鈺三郎の7つ年下、互いに大
阪を代表する実業家であった。大阪ロー
タリークラブ創立にあたってチャー
ターメンバーとして名を連ね、機会があ
るごとに日本の経済、政治、教育など
について意見を交わしていた。理想家肌の
平生と現実重視の小林は意見が違っ
ているかに見えても、互いに堅く信頼し
合っていた。これを示すエピソードがあ
る。平生を団長とする「訪伯使節団」が昭
和10年に結成された時、小林は後に彼の
後継者となる三男の米三を団長秘書、つ
まり「カバン持ち」として平生に託する
ほど深く信頼していたのである。

ところで第一次大戦後、日本経済は
失業問題が深刻で、高学歴者も例外で
はなく、1925年内務省の報告によ
ると大卒は約4割、高等専門学校卒で
約5割が職にありつけず、「大学は出た
けれど」が流行語になるほどであった。
小林はもちろん、七年制の甲南高校を
設立して日も浅い平生にとっても深刻
な経済不況は他人ごとではなかった。

社員採用時の「実力本位」か
採用後の「抜擢主義」か

平生が当時出したパンフレット「実力
本位の社員採用法につきて」で、平生と
小林の論法の仕方が興味深い。東京海上
火災の専務を辞して教育に専念しよう
と決心していた平生は、高学歴者の就職
難をこう考えた。日本では学校のランク
や成績が彼らの就職時の「正札」となり、
その後の人生を決するため、どんなに不
景気で就職難でも、誰もが帝大をめざ
す。しかし、人間千人十色。世間に名の
通った「正札」をつけた学生も、それを信

じて採用する官庁や会社も誤っている。
そこで平生は、採用にあたって、学校の
ランクに関係なく一定の実務実習期間
を設け、その間に能力などを見極めた上
で地位も仕事も報酬も確定すべきだと
主張した。ちなみに平生は後に川崎造船
所社長に就任するが、実務と教育を兼ね
備えたユニークな職工のための東山学
校を創設する。

これに対して小林は平生に共感しつ
つも、採用する側として平生の意見は実
行に困難がある、と私見を示す。一定期
間の実習といっても上司や部署に左右
され短期間で正確に審査できるもの
はない。むしろ長年多くの人によって評
価された「学校の資格や学業の成績」を
もとに審査するほうが「却って公平」で
ある。学校のランクではなく修学年限の
みを考慮するに止め、採用後は「抜擢主
義」で適材適所に配置すれば、「真の実
力」によって地位も仕事も報酬も与えら
れることになるだろう。

現代版「高等遊民」の可能性

今から約90年前、平生と小林が学生
の採用をめぐる「正札」か、「実力本
位」か、「抜擢主義」かで論争し合った
が、現在でも問題の決着はついていな
い。それに加えて最近ではAI(人工知
能)の普及で何もかもが便利になり、そ
のため人的就労機会が奪われる危険
が急速に迫っている。外国人労働者受
け入れ増加の問題もそれに付け加わ
る。また今論争を巻き起こしている、就
職に際しての学生の採用方法の自由化
までも本格化すれば、かつての「高等遊
民」が現代風に姿を変えて出現してく
るかも知れない。複雑化する雇用問題
の行く末を、大学としてもしっかりと
見据えていなければならぬ時代に、
なってきた。